

第 18 回中医学会勉強会 漢方応用講座

講師 路京華 老師

レポート：岸奈治郎（館林厚生病院漢方内科）

開催日：2015 年 10 月 3 日

今回は前回の症例を引き続いてやりましたが、主に路先生の解説でした。肝陽上亢と湿を捌くことが要点だった 16 回から続けてきた症例の治療を引き継いで、半夏白朮天麻湯の詳しい解説でした。

先ず初めに李東垣が記した脾胃論からの症例です。

「痰厥頭痛：範天駮之内，素有脾胃之證，時顯煩躁，胸中不利。大便不通，初冬出外而晚歸，爲寒氣佛鬱，悶亂大作，火不得伸故也。醫疑有熱，治以疏風丸，大便行而病不減，又疑藥力小，複加 70-80 丸，下兩行，前證仍不減，複添吐逆，食不能停，痰唾稠粘，湧出不止，眼黑頭眩，惡心煩悶，氣短促上喘，無力不欲言，心神顛倒，兀兀不止，目不敢開，如在風雲中，頭苦如裂，身重如山，四肢厥冷，不得安臥。」

（範天駮の奥さんはもともと脾胃が弱く時折煩躁がありました。便秘気味で、ある冬の夜に出かけて寒気に当たったため気が鬱結し吐いて、熱が外に出られなくなりました。とある医者が熱があると考え疏風丸（疏風清熱薬と思われるが不詳）を用いたところ大便がありました。まだ薬が足りないと考え沢山投与したところ、下痢をしたものの元の症状は変わらず、再び薬を与えたところ嘔吐し、食事が取れなくなり、粘った痰を吐くようになり、暗くなるような眩暈がして、悪心煩悶、息切れ、しゃべりたくない、心神顛倒、どきどきして、目を開けず、雲の上にいるようにフワフワして、頭が割れるように痛くなり、身体が山になったかの如く重く、四肢は厥冷し、ゆっくり横になっていられなくなりました。）

（参考）疏風丸（儒門事親）

通聖（聖）散一料加天麻半兩，羌活半兩，獨活半兩，細辛半兩，甘菊半兩，首烏半兩。
通聖散については様々な記載があるためどれにあたるのか不明。

～さて、ここでは何を処方されたのでしょうか？

平馬先生：真武湯 + 呉茱萸湯

岸：四逆湯

路老師：「これらの処方方は傷寒論の少陰病で使われる薬です。少陰病、吐利し、手足厥冷し、煩燥して死せんと欲する者は呉茱萸湯これを主る。と有ります。呉茱萸湯を使う目安とし

ては1：陽明寒嘔吐、2：少陰下痢、3：厥陰頭痛があります。ですからこの症例には良く合うように思います。もともと脾が弱かったところに寒邪にあたって陽が傷つき様々な症状が出現したと考えれば良い処方です。

しかし、眩暈がして粘っこい痰を吐いたり、山になったかの如く体が重くなるというのは湿の特徴です。」

(原文続き)

「餘謂前證乃胃氣已損，複下2次，則重虛其胃而痰厥頭痛作矣，制半夏白朮天麻湯主之而愈。」

(もともと脾胃が弱かったところに、2回の治療をしたために胃気を損なってしまった。半夏白朮天麻湯を作って与えた所治癒した。)

【組成】黄柏(酒洗)0.6克 乾薑 0.9克 天麻・蒼朮・白茯苓・黄耆・澤瀉・人參各 1.5克 白朮・炒神曲各 3、克 半夏(湯洗七次) 大麥蘗面橘皮各 1.5克

「此頭痛苦甚謂之，足太陰痰厥頭痛，非半夏不能療，眼黑頭旋，風虛內作，非天麻不能除，黄 甘温瀉火，補元氣，實表虛，止自汗，人參甘温瀉火，補中益氣，二朮俱苦，甘温除濕，補中益氣；澤瀉茯苓利小便導濕，橘皮苦温，益氣調中，升陽；神曲消食，蕩胃中滯氣，大麥面寬中助胃氣，乾薑辛熱以滌中寒，黄柏大苦寒，酒洗以療冬天少火在泉發躁也」

(この頭痛は非常に強くて足太陰痰厥による頭痛である。半夏で無いと治療できない。目の前が黒くなって眩暈がするのは虚証の内風で天麻で無いと除けない。天麻は定風草という別名があり、強い風が吹いてもゆれないので内風を治療することが出来る。黄耆は甘温で瀉火補元氣、表虚を補い自汗を止める。人參は甘温で瀉火、補中益氣、白朮と蒼朮はともに苦甘温で湿を除き補中益氣する。沢瀉・茯苓は小便から利水し、橘皮(陳皮)は苦温で気を補い中焦を調整、升陽する。神曲は消食し胃気滯を取り除く。大麥は胃気を助け、乾姜は辛熱で中焦の寒を除き、黄柏は大苦寒で、酒で洗うことで冬の天氣が温泉のようになるかのごとく、寒性が温性になります。)

路先生「この方剤を観察すると、風痰の症状をとるように構成されています。風痰によって生じた

肝陽化風…内風が起こり頭痛、眩暈、痺れ、振るえなどの中風症状が起こる。

脾湿生痰・痰阻清陽…溜まった湿によって脾の機能が低下しより痰が溜まる。それによって陽気の昇降が阻害され脳空を栄養することが出来ず眩暈になる。

風痰上擾清空…風痰によって脳空が侵され眩暈になる。

などの症状を取るため化痰熄風の目的に組み合わせられています。ここでは半夏・天麻の両方が君薬となっています。

肝風が起これば眩暈が起こる。痰湿が上を侵せば濁陰は上逆し眩暈は酷くなる。回転性眩暈を自覚しついいには嘔吐する。これらは化痰熄風の治療をしなければならない。

方剤中の半夏は燥湿化痰で降逆止嘔。天麻は平肝熄風、眩暈を止める。両者をあわせると

風痰による眩暈頭痛を良く治す要薬でこの二つが君薬である。

白朮は臣で、健脾燥湿。半夏、天麻とあわせると去湿化痰、眩暈を止める作用を助ける。

佐としては茯苓の健脾渗湿。白朮とあわせると生痰の本である脾を治すことが出来る。橘紅（陳皮）は理氣化痰で気を巡らせて痰を除く。

使薬としては甘草。薬を調和し中焦を助ける。生姜大棗も加えて、脾胃を調和する。

これらの薬を合わせると化痰熄風、風熄痰消、眩暈自愈の作用がある。

なので半夏白朮天麻湯は眩暈の薬として多用されている。耳が原因の眩暈でも良く使われ、頭蓋内の血流が原因によるめまいも改善すると報告されている」

『医学心悟』1732年に程国彭により著された。

その中に記された半夏白朮天麻湯

【組成】半夏 4.5 克 白朮 天麻 陳皮 茯苓各 3 克 甘草(炙)1.5 克 生薑 2 片 大棗 3 個 蔓荊子 3 克

【功用】燥湿化痰，平肝息風

【主治】痰飲上逆，痰厥頭痛者，胸膈多痰，動則眩暈。惡心嘔吐。

【方論】方中以半夏燥湿化痰，降逆止嘔，天麻平肝息風而止頭眩爲君；白朮運脾燥湿，茯苓健脾渗湿爲臣；橘紅理氣化痰，生薑、大棗調和脾胃爲佐；甘草協合諸藥爲使。諸藥相伍，共奏燥湿化痰，平肝息風之功。

路老師「この中には蔓荊子が含まれていて、現代の研究では

1. 神経内分泌調整作用があり、免疫促進、抗炎症作用などがある。
2. 心臓血管の調整作用があり、特に微小循環改善作用がある。
3. 病原微生物、腫瘍に対する作用があり、感染症や主要に対して用いられる。

といわれています。」

路老師「また医略六書では違う解釈になっています。」

「脾气大亏，痰食滞逆，不能统运于中，故厥逆头痛眩暈不已焉。苍朮燥痰湿以强脾；白朮健脾元以燥湿；人参扶元补气，黄耆补气固中，天麻法风湿以豁痰；泽泻泻 浊阴以却湿；神曲消食积开胃，麦芽化湿和中；茯苓渗脾湿；半夏燥湿痰；橘红利气和胃）生姜快膈散痰；黄柏清湿热，干姜温中气也，使气健脾强，则自能为胃行 其津液，而痰厥自平，良远温服，俾痰化气行，则胃气融和而清阳上奉，头痛眩暈无不保矣。此温凉并济，补泻兼施之剂，为气虚痰厥头痛眩暈之专方。」

あまり肝風のことは考えていない。脾胃が弱くて痰湿が原因となり胃気上逆した状態を治療するとしている。蒼朮は乾燥させる。白朮は健脾。人参黄耆で気を補う。黄耆は補気して固渋し、天麻は風痰を取り脳の症状を取る。全体として胃気が改善すれば陽気が上がってくるようになり、眩暈が改善するという治療方法です。」

「めまいについては色々な考えがあります。医学心悟では

- ・ 景岳全書によると「無虚不作眩」虚が無ければ眩暈にはならない。
- ・ 黄帝内经、素問、至真要大論に「諸風掉眩、皆属干肝」風による眩暈は皆肝による症状である。
- ・ 朱丹溪の丹溪心法では「無痰則不作眩」痰が無ければ眩暈は起きない。

と記されています。」

「頭眩，痰，挾氣虚並火。治痰為主，挾補藥及降火藥。無痰則不作眩，痰因火動。又有湿痰者，有火痰者。湿痰者，多宜二陳湯」

（頭痛は、痰が気虚を挟んでみな火になる。痰を主る物は補剤とともに降火薬を使っている。痰が無ければ眩暈は起きない。痰が火を動かす。痰湿のもの火痰のもの、痰湿のものは二陳湯を用いる。）

半夏瀉心湯は右図のような構成であって色々な方剤の骨格が見えます。

沢瀉湯（金匱要略）

「心下有支飲、其人苦冒眩、沢瀉湯主之。」

小半夏湯

「嘔家本渴、渴者為欲解、今反不渴、心下有支飲故也、小半夏湯主之。」

支飲があるのでいくら嘔吐をして津液を喪失しても口渇は出現しない。

小半夏加茯苓湯

「卒嘔吐、心下痞、膈間有水、眩悸者、小半夏加茯苓湯主之。」

突然嘔吐をしてみぞおちに水が溜まって動悸と眩暈がある者。

四君子湯（人参・白朮・茯苓・甘草）

異功散（人参・白朮・茯苓・甘草・陳皮）

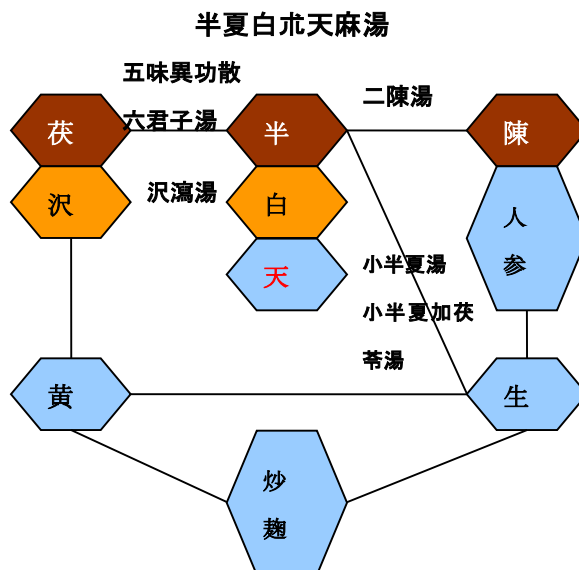
六君子湯（人参・白朮・茯苓・甘草・半夏・陳皮・生姜・大棗）

路老師「このように湿を除く処方はいろいろあります。上記では甘草を含んでいますが、半夏白朮天麻湯には含まれていません、それはなぜですか。」

岸「甘草の甘みが粘性があり、湿邪の粘膩性を憎悪させて取り除きにくくするからです。」

路老師「甘草は脾胃の機能を増して、生薬の薬性を穏やかにする働きがあり多くの方剤に含まれていますが、湿のような除きにくい邪に対しては良くないので含んでいません。」

「天麻：甘辛 平 甘



生の天麻はよく使われて前菜で食べたりします。潤いが多く乾燥させません。虚実を選ばない眩暈の要薬です。治風薬として重要で、去湿、止痛、行気活血作用があり、四肢麻木感（末梢神経障害、はれぼったい感じ）や破傷風などの痙攣、癲癇などに使います。」

「半夏白朮天麻湯のまとめとしては健脾和胃化痰定眩促進水液代謝剤、といえます。基本に脾胃虚痰湿中阻、濁気填中の状態があります。湿邪は陰邪なので陽気を傷つけやすい。中焦に湿が溜まると食べれば食べられるが空腹感がない。そして湿によって清陽が昇るのを阻まれ胃の降濁も妨げられてしまいます。ただでさえ日本人は海に囲まれた湿の多い地域なので気をつけたほうがいいです。邪魔する邪を取って脾胃を補い元に戻すというのがこの方剤の目的です。」

平馬先生「最初に出てきた李東垣の症例ですが、こう話を聞いていると半夏白朮天麻湯で良く治療できたんだと思います。が、あの症例は傷寒に当たって陽が傷ついて湿が溜まった症例なのだから急を救わなければならないので、やはり私の所に患者が来たならば真武湯のような温陽薬を使って治療すると思います（笑）。」

岸～傷寒論に偏っているといわれるかもしれませんが、やはり最初の症例は傷寒にあたって四肢厥逆した症例だと思います。脈も舌も示されていないので正確には判断できません。霍乱のような症状は見られていませんが、まずは四逆湯で回陽救逆しなければならないと思いました。

（参考）半夏白朮天麻湯 - 《古今医鑑》卷七

【来源】《古今医鑑》卷七。

【组成】半夏(制)4.5克 白朮(炒)6克 天麻 4.5克

【用法】上药锉碎。加生姜 3 片，用水 400 毫升，煎至 320 毫升，食后温服。

【功用】健脾化痰，平肝息风。

【主治】脾胃气虚，痰涎内停，虚风上搅，以致头旋眼黑，恶心烦闷，气促上喘，心神不安，目不敢开，头痛如裂，身重如山，四肢厥冷，不能安睡。心气不足。